令和五年五月吉日初版作成

真の中庸の道、大調和の道

高嶋　善三郎

目　次

●中庸の道を進むには・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
●神と人間の関係を明確に理解する・・・・・・・・・・・４
●自分の意識の波動が高くなれば、すべては輝く・５
●真の祈りが出来る・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
●自己否定が肉体人間側にないと消えてゆかない・７

中庸の道を進むには

現在ヨーロッパおいてロシアとウクライナ間で戦争が起きていますが、このような状況の中、私達はどうあるべきか、考えざるを得ません。このような状況で、論語で知られる孔子が根本の道として中庸の道を説かれましたが、その道で対応できますか。

この質問には、『宗教問答』問77「中庸を得た生活とは一体どのような生活なのでしょうか。またどうしたら中庸の道を進むことが出来るのでしょうか」をもとに整理していきます。

今から約2550年前中国の春秋時代と呼ばれる群雄割拠の時代、国の秩序体制をいかに保つべきか、各諸侯に孔子が根本の道として説かれたのが、中庸の道です。それが普通化して簡単に中正といった意味、または片寄らぬという意味で使われています。

これに対して五井先生は、真実の中庸とはそんな簡単な意味ではない。それではなかなか真実の道を進むことは出来ないと言われています。

何故かといえば、中庸の道を進むのには、まず自己意識による感情想念を超えていなければならない。感情想念に左右されたり、自己の利害関係、自己の周囲の利害関係に把われているようでは中庸の道を進むことができない。またすべての相対的な感情があってもいけない。相対的な考えがあって、自己のどちらかの分野に想いを置けば、もうすでにそのものが中庸の道からはずれてしまっているからと解説されています。

それでは、どうすれば、それが可能になるのでしょうか。

結論から言えば、肉体人間の自己というものを、神のみ心の中に投げ出してしまった五井先生の体験から、肉体人間観であるかぎり、不可能であり、人間神の子観を得ない限り難しいと言われています。

そして、「ご自分の体験を通して、この世やあの世の業想念に把われさせずに、いつの間にか神霊と等しい境地の世界の住者となり得る方法を教え始められたのである。それが消えてゆく姿と、守護の神霊への感謝、及び世界平和の祈りなのである。自己の想念を、常に日常茶飯事において神のみ心の中に投入しておくことこそ、中庸の生活がやさしく生れる方法であり、神霊の調和した、愛と真と美のみ心が自ずからその人々の生活の中に巧まずして発現されてゆく道なのである。」と私達が人間神の子観を得る方法を示してくださっています。

このお考えは、「ご自分の個我を天(神)に返上した日から、すでに肉体界人間に見えながら、肉体人間を超えた神霊の世界の住者となり、再びこの肉体界に舞い戻り、今日では、天と地の両界に生活している人間になり、この人間世界というものの複雑なる組織、神と人間との関係や、陰陽の道に入り得る方法などを、守護神守護霊各位から、次第に詳しく教えられ、常識を外さず、常識を超えたる生活ができるようになったのである。いわゆる肉体人間の形のままで、神霊人となりきることが出来るようになった」ご体験から解説されてたものです。

そして、中庸の道は、私たちが肉体人間観から人間神の子観に戻った時、真の中庸の道、即ち大調和の道となり、光り輝いている神のみ心の現れた道であり、世界になると言われています。

神と人間の関係を明確に理解する

前項において、人間神の子観を取り戻す方法について、整理しましたが、この方法をより効果的にするには、神と人間関係について、明確に理解し、神の働きを自分のものとすることが大切です。

これらの留意点について『神と人間』をもとに整理します。

「神とは宇宙に充満する生命の原理、創造の原理であり、人間とは神の生命を形ある世界に活動せしめんとする神の子なのである。即ち人間とは肉体だけではないのである。神、すなわち宇宙に充満せる生命が、その創造せんとする力が、個々の人格にわけられたもので、しかも横においてつながり合い、協力しあってその与えられた力を、縦横に、自由無碍に発揮し、形ある世界に、完全なる神の姿を描きだそうとしている者である」と言われています。

人間と神はどのような形でつながっているのかというと、

それは光（波動）の姿をしていますが、その働きの視点から見ると、神聖（本心)によってつながっています。

「神聖（本心)とは、大自然の根源の働きをする生命を、その智慧能力で、大調和達成のために生かしきってゆく働きである。この神本来の神聖の世界は、愛深き心、美しく清らかな心、真をつくす心、善事をなす心等々、すべて人間生活を高め、深める心のひびきの世界なのである」（『続宗教問９３）と五井先生は言われています。

また「神聖（本心)は、私達の肉体人間の外にあるのではなく、チャクラを通して脳天（第七のチャクラ）において、肉体以外の体、つまり幽、霊、神と仮に呼んでいる各階層の体につながっている。

神霊の階層の心の波動が、そのまま素直に肉体の脳天に伝わってきている心を神聖（本心）と呼ばれている。神聖（本心）は自分の頭の中や心臓の辺にあるのではなく、神のみ心と一つのところにあるのである。

しかし肉体人間の脳天（第七のチャクラ）が神界以外の階層即ち幽界から伝わってきている波動に蔽（おお）われてしまうと、神霊の心そのままの働きはできなくなるのである。そのような時業想念で神聖（本心）を求めても、神聖（本心）を自己のものとして、つかむことはできない。業想念波動を消滅したところから、神聖（本心）は現れてくるのである。（『愛するということ』）

この業想念に影響を受けなくなると、神聖（本心）と一体化となり、その働きを直に受けとめることが出来るようになるのです。

神聖（本心）は、私達が何を選択するか、また何に意識を集中するかによって、それらを実現するために瞬時にエネルギーを注いでくれます。良い選択等をすれば、いい結果が実現されまし、一方神のみ心から離れたことを選択等をすれば、不調和の姿をそのまま現わします。

神聖（本心）の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していくとも言われているのです。

また神聖（本心）に宣言すれば、その通りに実現してくれます。

この働きを理解し、それを自分のものとして活用すれば、人間神の子観を取り戻すことが出来ます。

自分の意識の波動が高くなれば、すべては輝く

『人間と真実の生き方』にそってひたすら歩むことが、真の中庸の道であります。では、それにより、何を目指していけばよいのでしょうか。

それは、自己の神我一体という言葉で表現されていますが、具体的には、私達自身の意識波動を高め、ひいてはこの世界人類の意識波動を高めることになります。

このことが理解できる体験について紹介します。

私は、五井先生がご存命中、聖ヶ丘道場において五井先生がご出席の統一会に幾度も出席させていただきました。色々もやもやした雑念をもちながら、行ったものでしたが、統一会が終わって帰る時は、心は晴れやかで、道端に咲く花々さえ輝いていました。そして今まで接することが嫌な人でさえ、輝いていたことを記憶していま

す。私の心にあった二元対立の心は、完全に消えていました。

その時は、み教えも完全にマスターしていたわけではありませんが、五井先生という聖者にお会いできた幸運によって、素晴らしい体験をさせていただきました。

五井先生がご帰神されて以降、み教えを整理してきましたが、その体験がいつも私の心の中心にあります。

もう少し分かりやすくするため、水にたとえてみてみましょう。

波動の高さを温度と考えます。

温度が零下になると、氷（固体）になります。また零度より高くなると、氷が解けて、水(液体)になります。温度が百度を超えると、水蒸気（気体）になりますが、この肉体界は、氷や水の世界のように、不自由な世界であり、水蒸気世界は自由自在の世界にたとえることができます。

意識波動が高くなると、すべて対立することがなくなり、別の言葉でいえば、あらゆる想念の把われがなくなり、すべてが調和されていくのです。即ち自由自在に、己れの欲する通りの世界を自己の周囲に現わすことのできる存在になることができるのです。

真の祈りが出来る

意識波動が高くなると、真の祈りが出来るようになります。

真の祈りについて、五井先生は次のように解説されています。

祈りというのは、自分の生命を宣（の）り出すこと。「私の生命は神と一つである。神の生命なのである」という宣言が祈りなのである。自分の肉体頭脳が祈るのではなく、宇宙神に向かって、直霊分霊が「私はあなたと一つです」と宣言するのが祈りなのである。肉体を動かしている生命と、宇宙に充満している生命との合体が祈りなのである。人類の平和をお願いするのではなく、平和であると宣言する。平和の祈りが宇宙神と一体となり、地球を覆う迷いを光で消すのである。生命と生命が結びつき、宇宙神と直霊―分霊が結びつき、神の力がそのまま流れてくる。真の祈りは、神自身がするのである。本当の祈りは強いのであると言われています。

ところが、肉体界の人間は、この肉体界を真の世界平和にする天命をいただきながら、常に肉体界という限界の中に思い悩み、憂い悲しみ恐れて、天の本体との間を絶え間なく業の波でへだててしまい、悪と不幸を生じて苦しんでいるが、守護霊、守護神は、肉体人間の天命を完うさ

せるため、日々業想念を浄め、導いてくださっている。その浄めのために力をさかれ、大きな浄め、世界人類救済のほうに全力を出し得ない状態に置かれていたのです。

そこで、神は、天の本体（直霊）や守護神、守護霊と等しき祈りになる世界平和の祈りを、五井先生を通じ教えてくださったのです。この祈りをすると、その瞬間肉体をつつむ業（汚れ）は一挙に突破されて真我一体（肉体界の自分がすべてを天の本体(直霊もしくは守護霊、守護神にまかせきった空（くう）の状態）となり、真の祈りができ、真の世界平和の到来を促進させることができるといわれているのです。

そうすれば、個人的には、不安はなくなり、不動の心になって来る。どんな苦しみが来ても、この大乗の祈りをしている人は、していない人よりも、心の底は安心しているので心に余裕があって、苦しくとも気が楽であり、苦しみが終われば、魂は素晴らしく飛躍するのであると言われているのです。（『五井昌久講話集1』「生命光り輝け」）

「

自己否定が肉体人間側にないと消えてゆかない

消えてゆく姿は、五井先生のみ教えの中で、世界平和の祈りとともに、最も重要な要素の一つです。

『人間と真実の生き方』において、消えてゆく姿は、すべての苦悩が過去世から現在にいたる誤てる想念がその運命となって現れる時におきる現象であり、その現象に把われることが、自分の意識波動を高めていく上で大きな障害になっています。消えてゆく姿の本質を理解すれば、その影響を最小限にすることが出来ます。結論から言えば、消えてゆく想念は、肉体人間観に関わるすべての想念であり、肉体人間側で正しい方法で自己否定すれば、容易く消えてゆくことに気付くことです。

『続宗教問答』１３３『詩集祈り』の中にある「“聖法然”の詩の中に－凡愚の自己が悟るのではない　凡愚の自己がみ仏のみ光の中に消えた時　その身そのまま仏になる　という言葉がありますが、ここのところを今少しわかりやすく教え下さい」をもとに整理します。

肉体人間の自己とは、「世界平和の祈りをしている自分は悟っているのだとか、世界平和の祈りをしているから自分はほかの人間より上等なのだ、というような、悟ろうとする自分と神とを引き離して考えたり、自他差別の感じを持ち、神のみ心と自分の心とがはっきり離れている状態の自分」であり、神仏との距離感や自他の差別感に基づく恐怖や悲し

みや怒りなどの業想念が後から後から出てくるとき、業想念に包まれた肉体人間が存在すると言われています。

これらの業想念を過去世からの因縁の消えてゆく姿として祈りの中に入れる、即ちそうした**自己否定が肉体人間側にないと、絶対に正覚を得ることは出来ない**。また人類としても、消えてゆく姿というのは、現象人間として現れている人類全部を実在出ないと否定し去らないと、実在する人類を現わすことが出来ない。

何故この世に現われている、つまり現象的人間を実在ではないとして否定し去るかといえば、人間の本性は神の分生命であり、神の子であるので、現在の地球人類のように、自分本位、自国本位の我欲で動いている人類を実在の人類というわけはない。こういう人類を実在とみとめている限りは、この地球は神のみ心を現わすわけにはゆかないので、遂には滅びてしまう。

そこで、日常茶飯事の間も、二十四時間プラスアルファの一瞬時も、救世の大光明のみ教えである、世界平和の祈りの中に入っている方法を五井先生は示されているのです。

一方自分の消えてゆく姿や、自分の身の周りや世界情勢の消えてゆく姿を前にしてどのように対処していけばよいかについて、五井先生は、私達にとって平易であるが、重要な方法を教えてくださっています

① 現われてくる激しい感情（怒・悲・苦悩など）を消えてゆく姿と認めてすぐ世界平和の祈りの中へ

② 消えてゆく姿に取り組むな（消えてゆく姿の原因をいろいろと詮索するなどをしない）消えてゆく姿というレッテルを貼る感覚だけでよい

③ 一回祈りに投入すると、その分は必ず消える

④ 必ずしも、すぐにスッキリしなくてよい

⑤ 焦らず、ひたすら練習あるのみ　（山崎多嘉子講師提供）

この中で、私達にとって注目すべき重要なお言葉は、②です。消えてゆく姿の原因をいろいろと詮索するなどをしないで、消えてゆく姿というレッテルを貼る感覚だけでよいという部分です。

何故重要かというと、業想念は、例えば宅配便のように行き先をはっきりすれば、その通りに消えてゆきますが、行き先を明確にしないと、また手元に還って来るからです。

また、神聖を理解し、自分のものとすると、あらかじめ業想念を「手放す」とか「神に捧げます」とか宣言しておくと、神聖はその通りに実現してくれるのです。私達にとって極めて心強いお言葉です。